うわさもん。 Uwasamon 若者応援

～益城の若もんも、がまだしよっぱい！～

町でうわさの若者を紹介。
夢に向かって全力で進む若者を応援します。

頑張っているもの

日本舞踊（花柳流）

名前　北村 天音（きたむら あまね） さん（12）

行政区　土山

「物心ついた時には踊っていました。今でも日本舞踊が大好きです」。目を輝かせる北村天音さんは、とにかく明るい中学の新入生だ。

始めたのは2歳の時。母子3代受け継がれた。天音さんは覚えていないが、その時使っていた扇子が教えてくれた。そのボロボロになった紙の部分は、「（天音さんが）食べちゃった（笑）」（母るみさん）という。

3歳で初舞台。堂々と〝決め〟のタイミングを外し、観客の大爆笑を誘った。「舞台の後、頑張ったご褒美をもらえるのがうれしくて、楽しくて仕方がなかったです」と当時を振り返る。

成長するにしたがって師匠花柳久寿晃（はなやぎくすあき）さんの稽古が厳しくなると、教えられたことがなかなかできず、日本舞踊の難しさと奥深さを知った。「苦戦しました」。笑顔で話した天音さんだったが、すぐさま「でも、好きでやっていたので、稽古が嫌になることはありませんでした」と切り返し、表情を引き締めた。そこには、努力を重ねて技を習得した充実感が漂っていた。

指先や目線にまで神経を利かせなければならない日本舞踊。古典（※）を習いだすと、難しさが増した。「腰を落とすのが一番難しいです」。ふらつきをなくすため、毎日腹筋運動をするなど体力作りにも余念がない。また、古典音楽は言葉がわかりづらいので、〝音を取る〟ため箏を習っている天音さん。さらに「三味線や竜笛、太鼓、笙など日本らしいものにもっとたくさん触れたい」と和への興味は尽きない。

日本の伝統文化に魅了され、まさに〝和のとりこ〟となった天音さん。「日本にはこんなにいいものがあるんですよ、という想いで踊っています。自分の姿を通して、和の魅力、楽しさをみなさんに伝えられたらうれしいです」。「おばあちゃんになっても、ずっと踊っていたい」。

※演歌などではなく、長唄など三味線ベースの邦楽に合わせた舞踊。決められた形を崩さないなどさまざまな約束事がある。

問い合わせ先　役場政策推進課イメージアップ戦略係　☎ 286-3210　FAX 286-4523　Ⓜ image-up@town.mashiki.lg.jp